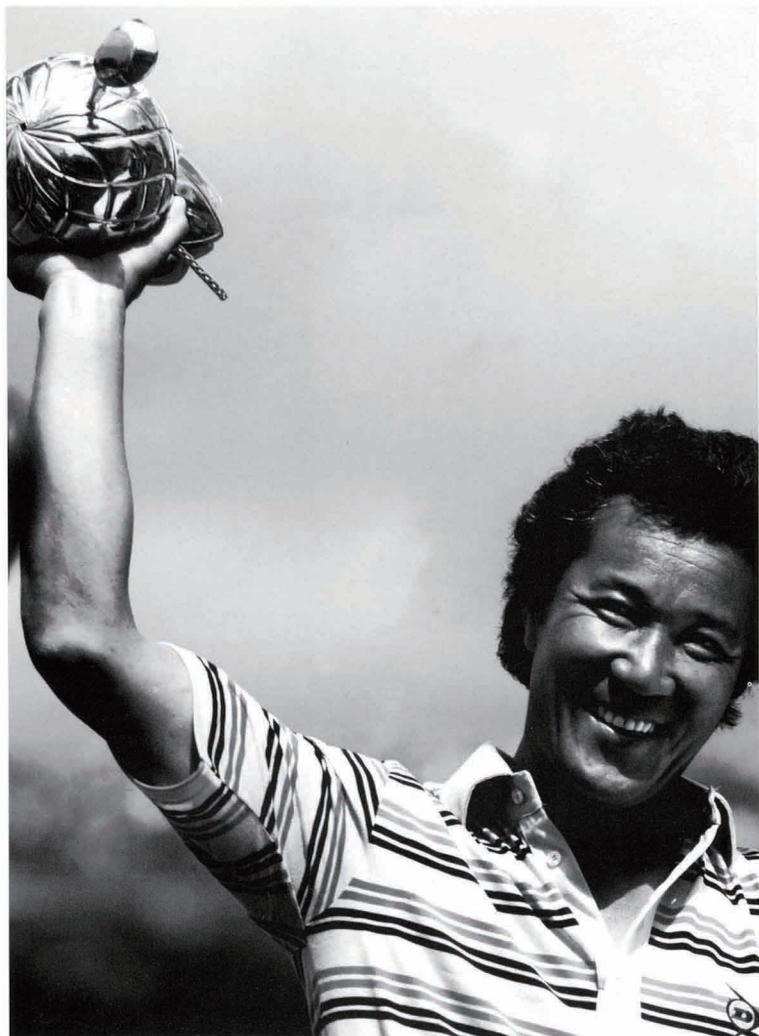


AJPS NEWS

ASSOCIATION JAPON DE LA PRESSE SPORTIVE



20周年記念スポーツフォトコンテスト入賞作品決定
座談会・スポーツの真意を書く

PENTAX Kōnica DESCENTE Nikon HCL
Canon SHASHIN Kōsha Kodak FUJIFILM MINOLTA



スポーツ界の中でも33年間と最も長い選手、プロゴルファー青木功。ジャンボ尾崎と共にOA時代を築き、ゴルフをメジャースポーツにした男は、'83ハワイオープン優勝(写真)を始め、日本・米国・欧州・豪州各ツアーで勝利し、世界の青木と呼ばれるようになった。現在米国シニアツアーの中心的プレーヤーとして活躍している彼の勝負師の目が今も印象に残っている。



撮影者プロフィール

和田 利光 Toshimitsu Wada

1946年、宮崎県出身。東京オリンピックの感動を、写真を通して伝えたいとスポーツ写真の世界へ。71年からゴルフ界に入り、マスターズ、全米オープン、全米プロ、全英オープン等、各国のメジャーを撮影。現在、専門誌を中心に活動している。

目次 CONTENTS

- 3 AJPS 座談会
「スポーツの真意を書く」
- 8 20周年記念
フォトコンテスト入賞作品決定
- 12 World Cup Memories
'78 ARGENTINA
- 14 Topics & Information

DAY BY DAY ＜スポーツ写真の記録性＞

水谷 章人

野球中継を見ていると、今から30年ほど前、私がスポーツ写真の被写体として初めて長嶋茂雄を捉えたあの瞬間が昨日のこのように甦ってくる。そして改めて写真の記録性について考えさせられる。

写真は一般的に記録写真と芸術写真と大別されるが、現在の傾向としてはオリジナリティーを求めた芸術指向の強い写真が優先される。しかし、スポーツの世界では、報道性と記録性を兼ねた写真に価値観がある。「いつ」「どこで」「だれが」「何を」といった内容の分かる説明的写真は記録写真として貴重であり、それはまた財産ともなりうる。写真的には面白くもない瞬間であっても、それが報道、記録の観点からすると、大変重要で価値ある写真となるのである。

スポーツ写真も多様化し続けている昨今、スポーツ写真家としてどのようにスポーツに関わってきたかを問う時、その時代に生まれては消えていったスーパースターやヒーローの感動の瞬間を今また甦らせること、記録写真を再生しようとする。

スーパースターを撮ることにより刻々と流れ、去っていく時代を表現する。時代のシンボル、人物のその一瞬を写し撮った写真は記録となって残る。やがて年月を重ねた時にそれは意義のある一枚の写真となり記録され続けていく。そして感動の瞬間が再び甦り、見るものにも新たな感動を与えることになる。記録として撮影した写真は意味深い記録写真として生き続けていくと強く思う。

目の前で展開されるスポーツや人間をありのままに捉え続けてきた30年を振り返ってみると、記録し続けることの大切さを改めて痛感する。何事も一日にしては成らず時間がかかるというのが実感である。写真を撮り続けてきたこと、そのことが再びテーマを生み喜びを感じることにつながる。

長期間継続することは大変難しいが意義のあることでもある。AJPSも20年の年月を重ねてきた。その経過を大切にしつつ、明日にむけて目的を遂行し続けて30年、40年を経過出来た時に、継続することの大切さや意義が分かるのではないだろうか。

スポーツの真意を書く

有料衛星放送の躍進で、競技が映像メディアの一つソフトとして売り買われる現在、スポーツジャーナリズムは確実に変化している。今回は、競技者を主体にスポーツを書き続けている4人のジャーナリストの方々に、スポーツへのアプローチのしかたを語っていただいた。



司会： 杉山茂樹

出席： 佐瀬 稔 白髭隆幸
折山敏美 山崎浩子

撮影： 兼子慎一郎

協力： カフェテリア オリンピア

杉山 皆さんがこの仕事を始められた理由を自己紹介も兼ねてお願いします。理でこの仕事を続けていらっしゃるのか？ 何が楽しいのか？ その辺からお話いただけますか。

折山 やっぱ現場に行くのが楽しいから、好きだからですわね。見て感動してくれば満足なんです。本当は観客でいらればいいんですけど、それだと続きませんから仕事にしてしまっただけで収入を得ている、というのが正直なところなんです。

行くから書く、書くから行く

杉山 取材に行かれるのはどの辺が多いんですか？

折山 僕は陸上競技、ノルディックのジャンプ、距離、それと身近なアマチュア競技に顔を出しています。

杉山 アマチュア競技が多いのは何か理由があるのですか？

折山 単なるへそ曲がりなんですけど、注目されない競技でも頑張っている連中を誌面があれば紹介したくて。彼等にもプラスに、そして自分もその競技の面白さを知って、それを伝えられたいと思っています。

杉山 佐瀬さんお願いします。

佐瀬 私はだいぶ違ってます。書くという仕事じゃなければスポーツを見に行かないと思います。書くから見るとあって、「これをどうやって面白く書け

るだろうか」というふしだらな下心があるから面白い面白いと見てられるんです。手ぶらで帰るわけにはいきませんから、正に興味本位で見てるわけです。

つい先日もアテネの世界陸上から帰ってきたんですが、開会式から11日間、面白い話を探す下心を持って見てきたから面白いのであって、あれを切符を買ってスタンドに座っていたんでは、あの暑いアテネには行かないですね。最初から書くのが好きなんです。杉山 現場に行かれるときは、白紙の状態で行かれるのですか？

佐瀬 いやー仕込みはいっぱいしますよ。今回も資料を集めたファイルを3冊持って行きました。横文字も縦文字も含めて。そういう仕込みがないと取っ掛かりが無いわけですから、勉強もするし、頭にいろいろ詰め込んで行きます。それでも、そういうものが役に立たない面白い事が起こるのでこたえられるんです。とにかく資料は持って行きます。そして書くときにはそれを全部ほうり出して書く。そういうことです。

杉山 山崎さんはどうですか？

山崎 私は今インタビューを中心にしていますから、その人を知るために試合を見に行ったり、練習を見に行ったりという形が多いんです。しゃべるより書くほうが好きなんです。

以前、ソウル五輪の時なんです

ボーターで行ってまして、水泳の鈴木大地選手に決勝の前にインタビューするという企画が出てきたんです。その時直感的に「出来ないな」と思ったんです。つまり本番前の気持ちを高めている選手に何を聞けばいいんだろう、邪魔をしたくないし……と思ったわけです。でも、大地選手が自転車で私たちに近づいてきたとき、スタッフに「一言でいいから聞いてくれ！」と言われて、いかに短時間で終わらせるかを考え、「鈴木さん、決勝頑張りますよね！」と聞いたんですが、「えー頑張りますー」と言って大地さんは行ってしまったんです。その時、自分ではボーター失格だなあと思いつながら、何か邪魔をしたというのも気になって……。こういう仕事はつらいなと思ったんです。

それで、私自身はしゃべるより書く方が好きだということもあって、自分が競技をやってきたという経験から通じる部分、通じない部分を照らし合わせながら、その人の内面などを伝えていきたいと思ったんです。わかり合える部分を如何に伝えられるか、というスタンスでやっています。文章でその人の人間性が少しでも表現できたらいいなと思っています。

杉山 取材に行かれて、現場で試合を見ることは多くないんですか？
山崎 競技にもよるんですけど、杉山 なるほど、そうですね。



世界陸上選手権アテネ大会開会式

photo: Takao Fujita

山崎 試合も好きなんですけれど、私はどちらかというと練習が好きなんです。サッカーの試合も好きなんですけど、どんな練習をしているのかなあ、という感じで練習風景を見に行くのが好きですね。そこに至るまでにどんな練習をしているんだろう、という方が興味があるわけです。

杉山 白髭さんはいかがですか。



杉山茂樹 Shigeki Sugiyama

大学卒業後からフリーランスの立場で活動するスポーツライター。サッカー（国内外）をメインに取材するが、五輪競技のいくつも併せてカバーする。掲載先は主に Number、サッカー専門誌等で、現場感、臨場感を盛り込んだ「スポーツ風景モノ」を得意とする。衛星系TVにゲスト解説としての出演もあり。

白髭 僕の場合「スポーツが好きだ」というところから入っています。父親がスポーツ好きで、子供の頃から見る機会は多かったんですが、原体験としては東京オリンピックの時、当時ちょうど10歳だったんです。

佐瀬 10歳ですか。

白髭 国をあげての一大イベントでいろいろな本もでたし、すごい盛り上が

りだったわけです。その閉会式の時、世界中の選手が国に関係なく一斉にスタジアムに入ってきて……。僕は素晴らしいと思いました。それが感動して記憶に残った最初の出来事でした。

その後自分でもスポーツをやってきて、学生の時には早稲田のラグビー部の追っかけをやったんです。東伏見や合宿に行ったり、友人と同人誌を出したりしていました。そのうち、報知新聞の方が紹介してくださって講談社から本を出すことになったんです。それがこの世界に入るきっかけだったと思います。大学の終わりには就職も決まっていたのですが、何か面白くないなと思って、編集者ということでそのまま講談社のスポーツ出版部に残ってしまったわけです。その後、スポーツライターとしてやっていけないかなと思ってこの道に入りました。

今自分としては、テレビや新聞といった速報性の強い報道の中では扱われていない部分を拾って「こんなこともあったんだよ」ということを伝えられたらいいなと思っています。それと、特に企業誌のような媒体を通して、スポーツを知らない人にスポーツの素晴らしさを知らせるためにはどうしたらいいか、といった感じの仕事も多くしています。全くスポーツに興味の無い人に、スポーツに興味を持ってもらうにはどうしたらいいか、何ができるかという点が今の自分の課題かもしれません。

杉山 どちらかというと、白髭さんも

折山さんの「現場に行きたい」という思いが強いんですか？

白髭 もちろんそれもあります。独身時代はそれで良かったんですが……。なかなかアゴ足付きの取材というのありません。自分で探して仕事を作らなければならぬわけですから、そう好きな所に行つてばかりもいられません、最近も……。

スポーツライターの市民権

佐瀬 今おっしゃった状況というのは、本当に変わったと思うんです。東京オリンピックの時10歳だった方が、こうして今スポーツを書いて仕事をしていらっしゃる現実。私が東京オリンピックを取材した報知新聞をやめようと思っていた頃、スポーツでものを書いてメシ食っていけるなんて全く信じられなかったですね。だから事実、会社はやめるんですが、やめた後ではスポーツとは縁を切っちゃって全く違うところで長い間仕事をしていました。あの当時、スポーツライターと称してですね、フリーランスでメシを食っていくなんて、夢にも考えられなかったんです。

折山 10年以上前ですけど、僕が週刊誌の仕事始めたときもスポーツといえば野球でした。たまに他のものというと、瀬古、マラソンの話、取ってこいとかね。

佐瀬 何かスキャンダルが起きなきゃ、活字にならなかったですね。

折山 その点、最近はずいぶんスポーツを取り上げるようになりましたね。

佐瀬 そういう点では、世の中は間違いなく良くなっていますよ。

杉山 佐瀬さん、最近もスポーツも多いですよね。

佐瀬 ええ。スポーツばかり書いています。

杉山 そう移ってきた理由は何でしょうか。

佐瀬 面白くなって行くからでしょうね。

杉山 正直なところ、スポーツと政治、社会問題とは佐瀬さんの中ではっきりと分かれているものなのですか？

佐瀬 スポーツにしても、政治、経済にしても、社会問題、事件、少年問題にしても、題材のうちのひとつではないんです。政治だからネクタイ締め

ていこうとか、スポーツだからTシャツで行こうとか、それはないんです。構え、スタンス、身なりは全く同じなんです。また、同じでないも務まらないと思うんです。スポーツの取材もO-157の取材もスタンスは変わりません。



佐瀬 稔 Minoru Sase

1932年、神奈川県生まれ。東京外語大学英米学科中退。報知新聞運動部長、文化部長をつとめた後78年に退社。フリーとなり、Rポルターージュ、ノンフィクションの執筆活動に入る。主な著書に「金属バット殺人事件」（日本推理作協会賞受賞）「ヒマラヤを駆け抜けた男」（第1回ミスノスポーツライター賞受賞）などがある。60年のローマ大会以来96年のアトランタ大会までオリンピックを継続取材中。

杉山 山崎さんはテレビでのお仕事もあり、あえてなぜライターとしての仕事も選ばれているんですか？

山崎 先ほど、書くことが好きだと言ったんですが、正確には書く方が好きだということです。実際に書いているときはあまりはかどらずにイライラしてしまいます。ただ、居心地の良い場所と悪い場所とでもいうんですが、私の場合はスポーツの現場に居たり、選手と話をしている方が居心地が良く、テレビのパラエティなどは面白くないけれど、あまり居心地が良くないんです。これ言っちゃうとテレビの仕事来なくなっちゃうかも知れませんが、今踊りもやっているんですが、踊ることは練習でも、積み重ねでも、発案の本番でも全て好きなんです。すごく居心地がいいんです。

書くことは、実際にインタビューをまとめていると構想が見えてこない時間があるってウロウロしたりするんです。ですからすごく疲れるんですけど、最終的には筋が見えてきて、これいいなあと自己満足しながら書いています。ただ「その人物の本当に言いたいことはどこなんだろう」という部分を汚さないように気を使います。自分自身、

現役の時にインタビューを受けたわけで、私の言いたいことはここじゃない、本意が伝わっていない、そして言葉ばかりを変えられたり、かわいらしく女の口調に変えられたりするのすごくいやだったんです。

杉山 「らしさ」ですか？

山崎 ええ、「らしさ」を出せるように気をつけて、相手に満足してもらえようことを気にしています。

杉山 選手ですか？

山崎 選手です。選手に気分良く読んでもらえるのか気になります。

杉山 折山さんは取材先で一緒にいることも多いんですが、我々は取材＝旅行みたいなところが多いと思うんです。現場に行くというところに特に思い入れがあるんですか？

折山 昔から旅行は好きでしたから、いろいろと移動することは取材と同様に楽しめます。ただ最近では札幌日帰りとか、福岡日帰りとかでも慣れてしまっていて、旅している気はなくなってきましたね。東京都内とか千葉に取材に行くのと同じ感覚で行って帰ってきてしまう。もったいないんですけどね。おいしいものもゆっくり食べたいじゃないですか。

佐瀬 旅というと、私は登山家のことを書くことが多くて、アルプスやヒマラヤに行ったことがあるんですよ。年齢が齢ですから山登りはつらいんです。ピーピーいうわけです。死ぬようなおもしろいから。もう3年位前になりますが、長谷川恒男さんという登山家が亡くなって、カラコルムのベースキャンプに行った時なんか目がクラクラして本当に死ぬようなおもしろいことがありまして、この苦しみを見返りも印税10%の中にも含まれているのかなあと激しい疑問を感じましたね。

スポーツ取材の現場

杉山 我々、現場に行かなくてはいけないから行くわけですよ。

佐瀬 でもね、カラコルムに行った時は、自分の仕事は何という職業なんだと思えましたよ。

折山 僕は全くスポーツとは違う仕事で一回屋久島に行ったんです。リュックしょって雨の中、山中2泊してきただけで、得したなあと思いました。

山崎 屋久島、私の実家なんです。自慢なんですけど。

折山 そうですか。安房という所に泊まって、食事のおいしい旅館があって。

山崎 ええ。

折山 でも雨の中、ヒルに食われたりしながらビショビショになって山歩いで、あの景色見に行つて良かったですね。仕事でないと行けませんから。

杉山 旅ライターでもなかなかやりませんね、そこまでは。白髭さんいろいろ小さな大会にも顔を出しているらしいですが、東アジア大会とか。

白髭 あれは意地で行ったようなところもあります。熊本のハンドボールの世界選手権にひっかけて。

折山 ひっかけるには遅くないですか？

白髭 いえ、まあ。釜山は今後アジア大会もあるし、街がどんな感じなのか見ておきたかったんです。地元がどういう感覚で大きな大会を迎えるつもりか。地元主導なのか、国家主導なのかなどもね。

杉山 現場に行く意味っていうんですか？ 楽しみは？

白髭 我々は現場を見なきゃ書けないんですよ。仕事が成り立たない。電話



白髭隆幸 Takayuki Shirahige

1954年、愛知県名古屋に生まれる。10歳のとき東京オリンピックを見てスポーツの世界に魅了される。編集者としてスポーツ関係の仕事に携わった後、90年にライターとして独立。夏冬オリンピックを現地で6回取材。ラグビー、サッカーを中心に幅広くスポーツをカバー。日本オリンピックアカデミー、サッカーライターズ協議会会員。

取材とか人から聞いた話でも記事にはなりませんけれどリアリティーはない。僕は見たものを信じるから現場に行きます。テレビ見て書くんだったら仕事はしません。

佐瀬 大きな大会の現場での本当の楽しみというのは、テレビに映らないものを自分の目で見て掘り出している

日本スポーツプレス協会 20周年記念 スポーツフォトコンテスト入賞作品決定

「スポーツ写真と言っても、プロカメラマンによる一流選手の決定的瞬間の写真ばかりではない。どんなスポーツにも感動があり、一生懸命愛情を込めて夢中でシャッターを切ったとき、フィルムには永遠のドラマが残る。そこにはプロやアマの垣根はない」

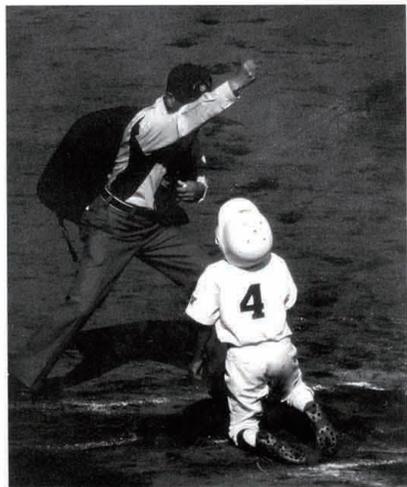
このコンセプトのもとに行ったスポーツフォトコンテストは、スポーツ写真の新たな可能性を求め、広く一般から作品を募集しました。

その結果、全国46都道府県（残念ながら沖縄県からの作品は台風の影響で作者に返送され、審査日までに再送付できな

かった）と海外のスイスから集まった作品は2500点を超えました。

9月2日、ゲスト審査委員に田沼武能氏（日本写真家協会会長）、北大路欣也氏（俳優）、青島健太氏（スポーツライター）を迎え、当協会から水谷章人（会長）、中谷吉隆（顧問）が出席して審査を行い、次の方々の入賞が決定しました。このスポーツフォトコンテスト及び入賞作品展、また協会展「地球でスポーツ'97」が各社のご協賛、ご協力のもとに実現出来ましたことをあらためて御礼申し上げます。

20周年記念事業実行委員会 薬師洋行



審査風景 photo: Takao Fujita

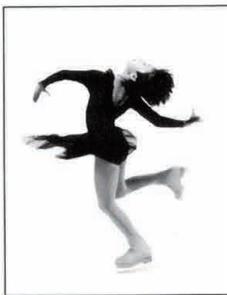
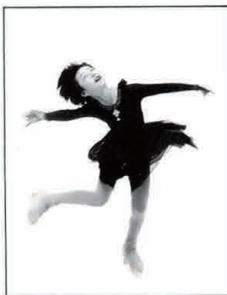
最優秀賞

野口清三 「ああ無情」
(カラー作品)

優秀賞

田中匡夫 「銀盤に舞う」
(カラー作品 2枚組)

優秀賞が1点となったのは、通知発表後に本人からの辞退の申し出により入賞取り消しとなったためです。

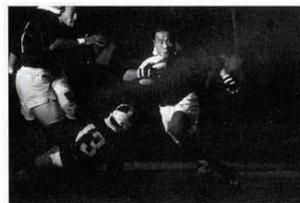


協会賞

村上吉秋 「藤の青春たち」
(モノクロ作品 4枚組)



横沢正 「惜打」
(カラー作品)



水谷たかひと 「EDGE」
(カラー作品)



大村祐治 「ゴールを目指して」
(カラー作品)



芳賀文夫 「スタート」
(カラー作品)

コンテスト総評

日本スポーツプレス協会顧問 中谷吉隆

今回のコンテストは「プロ、アマを問わず」というスケールの大きなもので、全国各地から多くの作品が寄せられました。被写体となっているものは、身近なスポーツ、遊びなどからビッグゲームまで多岐に及んでいて、昨今のスポーツがいかに身近になったかを感じさせるものでした。

カラー、モノクロとも単写真から数枚の組写真まで、その表現には広さがあり、いかにスポーツ写真自体が近い存在になったかを見せてくれました。

スポーツの持っているスピード、パワー、リズムに焦点を合わせタイミング良く切り撮られた作品群は十分に見えが

あり、上位の作品は甲乙つけがたく、審査には相当の時間を要しました。

また、スポーツのスピード感や躍動感を表現したのもだけでなく、競技に臨んだ選手の表情にカメラが向けられていて、スポーツ全体の中から何をテーマにして撮ろうとしたかがうかがえる作品もあり、これには感心させられました。

機材の発達によってスポーツ写真が撮りやすくなったことでもあります。何を撮ろうとしたかがはっきりしている写真は心打つものがあります。今後のスポーツ写真にも大いに期待が寄せられます。

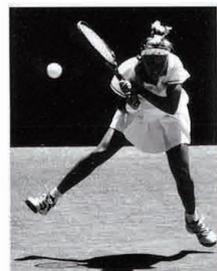
協賛社賞



デサント賞
岩附康則 「やっー」
(カラー作品)



コダック賞
加藤政和 「シマッター」
(カラー作品)



写真弘社賞
長吉秀 「瞬間」
(カラー作品)



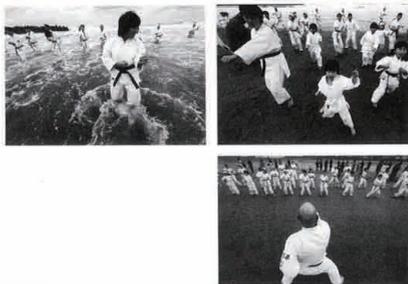
富士フィルム賞
高瀬和秀 「ボールとの一瞬」
(カラー作品)



ニコン賞
井上佳計 「躍動」
(カラー作品)



堀内カラー賞
池田宏 「勇ましい子」
(カラー作品)



キヤノン賞
杉山良一 「唐手道場の初稽古」
(カラー作品 3枚組)



ペンタックス賞
宮地敏雄 「泥亀競走」
(カラー作品)



コニカ賞
阿部儀晴 「春の競技場」
(カラー作品)

入賞

関口晴子	「整列」	天野宗謙	「私ピストル苦手なの」
久保田美雄	「いっせいにスタート」	田口新三	「どおかなー」
早田辰男	「勝利にむけて」	新屋峰子	「熱戦」
沢野裕之	「Girl hood II」	榎原俊寿	「WATER SPRAY」
国分智	「Dangerous Zone」	小木曾和哉	「瞳を閉じて」
南一彦	「泣き相撲」	西村栄八	「突破」
佐藤茂樹	「カヌーC-1」		

審査印象



田沼武能 (日本写真家協会会長)

沢山の応募作品が集まって素晴らしいコンテストになったと思います。そして何より「プロの真似」をした写真が少ないのが印象的でした。アマチュアの写真らしい、アマチュアにしか撮れない、親子や家族の日常的なスポーツをテーマにして写したのがよかったです。

入賞した作品はスポーツの持つ独特な雰囲気を持ち、偶然性にも富み、感性も感じられ、そして技術的にも非常に優れたものだといえます。

「スポーツ」というと一見難しそうなテーマですが、もっと易く考えて写真を撮ってほしいと思います。

なお後日、優秀賞に入賞した作品が他コンテストでも入選したことが判明し、本人から受賞辞退の申し出があって入賞取り消しになったことを知りました。たくさんのコンテストが行われている昨今、多重応募や、類似作品の多いことも事実で、今回のように本人の意思によって受賞辞退されたことは勇気ある決断だと思います。

これからもコンテストに応募されるカメラマンの皆様には、スポーツマンシップ同様の誠実さを期待します。



北大路欣也 (俳優)

数多くの作品が、全国から集まっていたのにはビックリしました。どの作品からも一生懸命心を込めて撮った感情が伝わってきて、殺伐とした今の世の中にあって見たものの心を爽やかにする清涼感を感じさせてくれました。

私の目に最初にとまったのが最優秀賞を受賞した作品で、選手も審判もその表情は見えませんが、後ろ姿と手から、訴えるもの全てが伝わってきます。そのうえ最優秀賞決定後、撮影者の年齢が70歳と知らされてあらためて感動しました。

本当に楽しい審査をすることができ感謝しています。



青島健太 (スポーツライター、TBS「炸裂スポーツパワー」出演)

初めてスポーツフォトコンテストの審査委員を務めさせていただきました。私自身スポーツを楽しみ、平日頃トップアスリートたちの取材をしています。今日審査した多くの応募作品からは「スポーツの原点」といえるものが感じ取れました。

今回の作品のいろいろなスポーツシーンには、人と人のふれあい、人間のぬくもり、喜怒哀楽が表現されており、さまざまなメッセージが伝わってきます。チャンピオンスポーツだけでなく、このようにヒューマン溢れるシーンがあるからスポーツは楽しいのだと思います。

<協賛各社>

旭光学工業株式会社
キヤノン販売株式会社
京セラ株式会社
コニカ株式会社
株式会社写真弘社
株式会社デサント

株式会社ニコン
日本コダック株式会社
富士写真フィルム株式会社
株式会社堀内カラー
ミノルタ株式会社

(五十音順)

<協力>

文化堂印刷株式会社
ヒルサイドテラス
パドワイザージャパン

World Cup Memories

Vol. 1 ワールドカップサッカー No. 3



今回は1978年6月。初冬のアルゼンチンが舞台である。勝ち進む地元チーム。決勝を迎える南米の都での出来事を、当時朝日特派員の記者として行かれていた中条一雄氏に綴っていただいた。

'78 アルゼンチン大会

文 中条一雄 写真 松本 正

text : Kazuo Chujo photo : Tadashi Matsumoto

闘牛士、紙吹雪、軍事政権…

アルゼンチン大会前に、ブラジルの友人がブエノスアイレスに住む一人の日本人を紹介してくれた。数年前、農業移民をしたが途中で農業をあきらめ、いまは通訳をしているという。まだ20代で独身の彼は、自分のアパートに泊まれ、と言ってくれた。

一部屋しかないアパートで、私は彼のベッドを占領し、彼は床の上で寝た。1カ月間、私はここを基地にして、あちこちの試合地に遠征した。ブエノスアイレスで試合がある日は、彼は必ず大きなステーキを焼いてくれた。

なにしろ人口2500万人の倍にあたる5000万頭の牛がいる国。ワラジのようなステーキが300~400円で食べられる。いちばん安上がりな食べ物だったわけだが、腹がいっぱいになった。まるで、学生時代のような気ままな生活だった。

ベレ、ベッケンバウアー、クライフらが引退し、「小粒の大会」と評されていた。だが、地元アルゼンチンが、すごい根性というか執念というか、情熱を發揮して優勝し、結構おもしろい

大会だった。国旗をかたどった白と淡青のタテ縞のユニフォーム、太もも丸だしの黒の短いパンツ、肩までかかる長髪の手がさっそうと走り回る姿は、とにかく格好よかった。記者席の横でアナウンサーが「独身のケンベスのハートを射止めるのは誰でしょう」などと怒鳴っていた。

私は、アルゼンチンのほかにイタリア、オランダに注目していた。第一次リーグでアルゼンチンが巧技のイタリ

アに敗れ、第二次リーグでイタリアが巨漢ぞろいのオランダに敗れ、決勝でオランダがアルゼンチンに延長の末に敗れた。三すくみになったわけだが、とにかくこの3試合はすべて見ごたえがあった。

いま一つの優勝候補ブラジルは第一次リーグを南の港町、マルデルプラタで試合したが、守備陣に頭大な大男をそろえて、とにかく安全第一主義で取りこぼしを避けようという意図があ



りありだった。体の鍛錬に宇宙飛行士の訓練を採用した、とも聞いた。最初の2試合を引き分け、第3試合でオーストリアに1-0で勝ってやっと第二次リーグに進んだ。

この1点は、右サイドからの糸を引くような見事なクロスを、左で待っていたロベルトがドガンと一発決めたもので、マルデルプラタでのこのシーンはいまでも私の胸に残っている。

第二次リーグで、アルゼンチンはペルーに対し4点以上をあげなければ、得失点差でブラジルに劣って、決勝に進めないところまで追い込まれた。だが、2ゴールを挙げたケンベスらの活躍で計6点もとった。

マスコミが「八百長ではないか」と騒いだが、3位決定戦でイタリアを破ったブラジルは、結局、第一次リーグから引き分けばかりで、一回も負けなかった。ブラジルのファンが頭に来たのも無理はない。ブラジルの農場主が雇い人のペルー人と口論になって、ペルー人の耳を削ぎ落としたという記事が新聞に載っていた。

6月25日の決勝は、前大会の決勝で地元西ドイツに惜敗したオランダと、またしても地元アルゼンチンの戦いになった。前半アルゼンチンはケンベスが1点を先取したが、巨漢ぞろいのオランダは、後半徐々に反撃、一方的に押しまくって同点とした。

延長に入っても空中戦に強いオランダが優勢で、アルゼンチンはとも勝ちはないと思われた。ここで重苦しい雰囲気を超えるように、再びケンベスが登場する。前半終了直前、闘牛士のニックネーム通りの突進力をみせた。一度はキーパーに止められたが、一本足で踏ん張り、そのまま押し込むようにして奇跡の勝ち越し点を挙げた。

彼の体はボールといっしょにオランダのゴールに駆け込んだ。ボールよりも先にゴールインしたのではないかと



思えるくらいの迫力だった。あせるオランダに対し、アルゼンチンは後半9分にも見事なカウンターからオフサイドぎりぎりに入り込んでいたペルトーニが決めて逃げ切った。

優勝が決まった瞬間から大騒ぎがはじまった。8万人のリバープレート・スタジアムの大観衆は抱き合うようにして躍り上がり、紙吹雪が雪のようにスタンド中を舞った。ブエノスアイレスの通りという通りに人々が繰り出し、行進が朝まで続いた。中心通りのコリエンテス通りには紙吹雪が数センチも積もった。

「ブーブー、ブーブ」と、長い音を2回、短い音を3回鳴らすラッパの音で鼓膜が破れそうだった。タクシーも「ブーブー、ブーブ」と鳴らして走っていた。喧嘩を避けて地下鉄に乗ろうとしたら、電車までも「パーパー、パババ」と音を立てて駅に入ってきた。ラプラタ河の汽船も「ポーポー、ポボボ」とやっていた。

アルゼンチンの知人は茶目っ気たっぷりに「KLMがオランダをやっつけた」と自慢した。KLMはオランダの航空機であり、ケンベス、ルーケ、そしてメノッティ監督のことを指していた。

当時のアルゼンチンは、二年前に発足した軍事政権が支配し暗い雰囲気だった。公園では、行方不明の夫や息子を求める女性が集会を開いていた。だが、さすがにサッカーの国、暗い雰囲気が逆に国民全体が東の間の幸福を求めて、燃え上がる素地になった。反政府勢力は「大会期間中は一切テロはしない」と声明を発していた。

ビデラ大統領が外人記者のためレセプションを開いた。私は東京に発信した残り原稿の片隅に、彼のサインをもらった。アルゼンチン国民にとり、W杯という1カ月の安らぎの時は、あっけなく終わった。ビデラは、その後終身刑を宣せられた。■

インフォメーション

銀座キヤノンサロン
新装オープン



キヤノンサロンは写真仲間のお話がはずむ、写真を観て語る憩いの場として、銀座にオープンしてから来年2月で25年を迎えます。四半世紀にわたって、プロ、アマチュアの個展、そして各種コンテストの発表の場として広く写真愛好家の皆様に愛されてきております。今回、全面的に改装を行い、より一層写真を楽しめる場として8月末にオープン致しました。1週間単位で写真展を開催しております。2Fには皆様の憩いの場としてのサロンスペースも設けております。銀座へお越しの折にはぜひお立ち寄りください。

銀座キヤノンサロン 田村民雄

「第9回コニカ写真奨励賞」
応募者募集

「コニカ写真奨励賞」は、制作しようとする写真作品のテーマと制作意図、活動の日程計画などを提案していただき、審査の上1名の方に、制作費用の援助として奨励金500万円を贈呈し、1年～1年半後にコニカプラザで発表写真展を開催していただくものです。

〈応募概要〉

応募資格：写真家。個人。応募したテーマと制作意図によって、1998年11月中旬までに写真作品を制作し、コニカプラザ西ギャラリーで発表写真展を開催出来る方。

応募方法：下記の資料をコニカ写真奨励賞事務局に提出して下さい。

1. 応募者の経歴と制作テーマ、日程計画を記入した応募用紙（書式自由）。
2. 制作テーマにチャレンジする意図を1000字以内でまとめたもの（A4縦）。
3. 2年以内に制作した写真作品約30点（4切サイズ以下のプリントまたはカラーズライドで制作テーマを具体的に予見できるような作品。但し、スライド

の場合ガラスマウントはご遠慮下さい）。
応募先：コニカ写真奨励賞事務局宛
〒160 東京都新宿区新宿3-26-11
高野ビル4Fコニカプラザ内
応募締切：1998年2月末日（持参、郵送いずれも締切日までに必着）
授賞発表：1998年4月下旬本人に通知します。
奨励金：1名に500万円（税込み）
主催：財団法人コニカ画像科学振興財団

★ ★ ★

写真展開催

水谷章人

Ski Graphic 1967～1997

「光と影 そして風」

富士フォトサロン スペース2
11月14日（金）～11月20日（木）

Sports Graphic 1967～1997

「THE SCENE」

銀座キヤノンサロン
11月17日（月）～11月22日（土）

★ ★ ★

テストレポート

「ASTIA」フィルムテストについて — RDP II との比較 —

今井恭司 Kyoji Imai

今回は、まず同一条件でのスタジオ撮影（定常光）で比較してみた。

撮影物は、陶器、チョコレート、24色の色えんぴつ、化粧品（プラスチック容器）。ノーマル、±1/2、±1では全くと言って良いほど差異は生じなかったが、+1 1/2でようやく違いが出てきた。陶器のハイライト部分のエッジが、RDP II はバックに溶け込んでしまったが、ASTIAの場合はオーバーの中でもしっかりとエッジ部分を残していた。

さて、スポーツシーンではどうだろうか。季節や時間帯、照明など撮影条件は様々だ。例えばナイターの場合、同じスタジアム内でも、ポジションによって照明比が異なり、比較テストは難しい。しかし、良い条件で撮影できた場合は、たいして結果も良いので、「これは良いフィルムだ」と言いがちである。今回は、条件の悪いナイター撮影での比較を試みた。柏スタジアムと福井テクノポートスタジアムで、それぞれ+3（ISO 800ではなく640相当として）でテストをした。フィルターで補正しているとはいえ、ASTIAでのユニフォームの白が驚くほど白に出ているではないか！ 抜けてもRDP II とは比べものにならないほどクッキリと仕上がりが、スタジオでのテストのときには感じなかった満足感を得ることができた。

ASTIAは、条件が多少悪くても結果を出してくれるすぐれものである。

新製品

ニコン
世界初AFズームマイクロレンズ
AiAFズームマイクロニッコール
ED70-180mm/F4.5-5.6Dを新発売



株式会社ニコンから、一眼レフカメラ用AF交換レンズとして世界初のズームマイクロレンズ「AiAFズームマイクロニッコール ED70-180mm/F4.5-5.6D」が発売された。

このレンズは、特に屋外で草花や昆虫、小動物などのクローズアップ撮影をする際に、撮影位置を変えずに撮影倍率やフレーミングを自由に変更できるなど、単焦点マイクロレンズにはない機動性が得られる。また、ニコン独自のEDガラスを採用して色収差を抑え、高画質な写真撮影が可能。最大撮影倍率は180mm時で1/1.32倍。撮影距離情報をカメラボディに伝達する機能も装備し、対応カメラとの組み合わせでは距離情報が加味された、より最適な露出が得られる。全長約175mm、重さ約990g。
希望小売価格 ¥168,000（フードHB-14付、税別）

コダック
プロフェッショナル NC-2000e
カラーデジタルカメラを新発売

日本コダック株式会社は「コダックプロフェッショナル NC-2000e カラーデジタルカメラ」を発売した。このカメラは、米国AP通信社とコダック社が共同で報道撮影用に開発。高感度・ワンショットタイプのデジタルカメラで、ボディにはNikon N90を採用しており、通常の一眼レフカメラと同じ感覚でのデジタル写真撮影を実現している。

主な仕様

- ・130万画素（1024×1280）CCDセンサー搭載
 - ・ダイナミックレンジ 36ビット
 - ・感度 ISO 200～1600相当
 - ・フレームレート 2.5コマ/秒で12連写まで可能
 - ・全てのNikonマウントレンズの使用が可能
 - ・内蔵バッテリーフル充電で最大約400コマの撮影が可能
 - ・簡易画像補正機能
 - ・内蔵マイクで音声録音が可能
 - ・外部インターフェースはSCSI
- Adobe PhotoshopプラグインモジュールとWindows上で動作するTWINドライブ付属。
寸法170（W）×114（D）×208（H）mm 本体重量1.7Kg。
希望標準価格 ¥1,980,000（本体のみ、税別）

ペンタックス
ズーム比4倍の望遠ズームレンズ
FA 80-320mm/F4.5-5.6 新発売



旭光学工業株式会社から、35mmAF一眼レフカメラ用ズームレンズ「FA 80-320mm/F4.5-5.6」が新発売された。ポートレートに適した80mmから、本格的な望遠撮影が可能で320mmまでのズーム比4倍の焦点距離を持ちながら、長さは129mm、重さ550gというコンパクトな設計で機動性に優れている。

また、焦点距離全域で最短撮影距離1.5mが可能である。最大撮影倍率は0.28倍。
希望小売価格 ¥45,000（本体のみ、税別）

★ ★ ★

日本スポーツプレス協会会報 No.14

1997年10月1日発行

編集・発行人 水谷章人
編集スタッフ 赤木真二 山崎浩子 兼子慎一郎
竹内里摩子 荒川雅臣
編集・発行所 日本スポーツプレス協会（AJPS）
〒112（郵便番号は〒112-0013）
東京都文京区羽羽1-21-10 関根ビル602
TEL 03-3946-9033
FAX 03-3946-9036

本誌掲載記事、写真を無断で転載することはできません

AJPSニュースでは皆様からの情報をお待ちしております。催しもの、出版物、写真展のご予定などを事務局までお寄せください。

なお、当協会事務局の住所が変更になっております。ご注意ください。

また、ISDN導入に伴いFAX番号が追加されました。



日本スポーツプレス協会